

漆が秘める新たな可能性 ～ うるし × いと ～

クラフトゼミ

a2201004 大島 優衣

I. 研究概要

漆という素材が秘めている可能性を提案できるような造形作品を制作し、糸を用いることから縄文時代に焦点をあて、研究する。

II. 研究背景と目的

- 約 2 年間、漆という素材に触れ学んできた中で、漆の多彩な表現方法を知った。しかしそれと同時に、一般的に漆が日常生活において身近に存在していないことを感じるとともに、人々が漆という言葉から連想する伝統的、堅苦しいというイメージを変化させたいと思った。

⇒漆の可能性を広げ、新たな表現方法を提案する

- 以前より染織・服飾分野に興味があり、会津・漆の芸術祭 2010 でみた繊維を用いた作品から、漆と糸を使用した作品制作がしたいと思った。また福島県立博物館において、福島県三島町(荒屋敷遺跡出土)で発掘された縄文時代の糸玉をみたことをきっかけに漆で糸を染色してみたいと思った。

⇒糸に漆を塗る(染色)ことでどのような質感、印象が得られるかを研究する

⇒漆の原点である縄文時代に焦点をあて、表現手法として取り入れ制作する

III. 作品コンセプト

【作品タイトル : 心髄 】

私は以前まで、漆と言えば伝統工芸分野であり高価なイメージしかもっておらず、漆は漆器製品しかないものだと思っていたが、学んでみて漆の表面的なことしかみていなかったと感じた。実際は手仕事だからこそ感じられる温かみやものづくりの良さ、多彩な加飾方法で異なった印象を見せたり深みのある色や艶があったりなどのさまざまな魅力があることを知った。また漆は木だけでなくプラスチックや布、紙などさまざまなものに塗ることができる可能性の多い素材だと思った。

作品は二層になっており、外形は漆が滴るような、赤ちゃんが包み込まれているような(糸のもつ温かみや癒し、安心感から連想)、両手で守られているようなイメージを抽象的な形にした。また内形は漆の原点でもあり、また漆塗りの糸玉が発見され漆と糸の関係が深いことから縄文時代との関わりを重視し、布独自のディテールを表現しつつ、縄文のイメージを糸のもつ柔らかさを崩さないよう表現した。内形は、物事の原点や良さは内に秘められていることを表現している。

【使用素材】 漆, 麻布, 綿糸

【大きさ】縦 72 × 横 72 × 高さ 83cm

IV. 制作工程

- 作品アイデアスケッチ
- 原形作り
- 離型処理
- 布着せ①(荒)
- 布着せ②(細)
- レース貼り, 糸巻き
- レース部分の切り抜き
- 漆塗り
- 脱乾
- 蒔絵

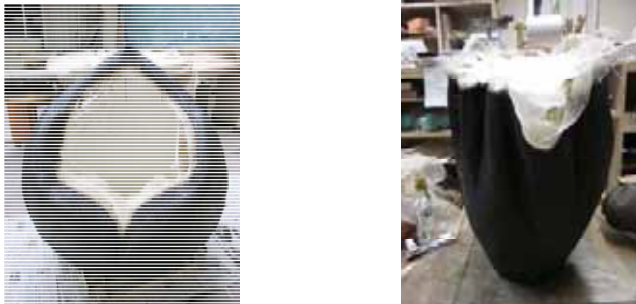
+ 同時進行でレースを編む



▼原型制作



▼布着せ



▼レース張り, 糸巻き



制作したレース



布着せ拡大画像



糸巻きの拡大画像

V. 感想

初めてレースを編んだため歪んでしまったり糸がきつく引っ張られてしまったが、漆を染み込ませたことで糸の質感がよく表れたと思う。またレースを大量に編むことに多くの時間がかかり、思うように作業を進められなかったと感じた。